



[新連載]

プロジェクトが小学校英語を変える!

[第1回]

小学校外国語活動で 求められる活動

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

◆……はじめに

2011年度より年間35単位時間、小学校の第5学年と6学年において、領域として「外国語活動」が実施されることを受け、本連載は、いずれの公立小学校においても、担任が中心となって実践される際に役立つと思われる具体的な提案をすることが目的です。6か月にわたり、年間カリキュラム作り、単元の進め方、教材作りの方法、授業で使用するワークシートや評価などを扱い、移行期の2年目、そして新教育課程で、より自信を持った授業実践ができるように具体例を提示します。

連載を通して理解していただきたいことは、外国語活動の授業は、小学校教育課程における他の教科や領域と基本的には同じ授業展開であること、また、他の授業と同様に学級経営とは切り離せないものであり、特別な授業であったり、専科（外国語活動）教員や外部からの講師、外国人講師などが中心になって進めたりするものではないこと、さらには、よいと言われている学習内容や授業展開、教材を授業に持ち込んでも、支持的風土のある学級集団が育ち、学習を共に進めていく学習集団でなければ、よい授業は成立しないこと、です。この意味で、外国語活動においても学級集団・学習集団を育てていく（育ててきた）学級担任が中心になって授業をすることは十分理解していただけるのではないかと思います。

◆……用語のまとめ

「プロジェクト」は一連の活動全体を包括する用語です。教師によって与えられた（あるいは、児童自身が考えた）課題に対して、児童自身が具体的なゴールを設定し、ある程度のまとまった時

間（年間35時間の外国語活動においては7時間程度）をかけて解決したり、成果物を作ったりすることなど全体を指します。プロジェクトは、いわゆる「単元」の一種と考えることができ、一般的に使われている学習や活動のまとまりを指します。

プロジェクトでは、課題解決型の活動が中心となりますので、第二言語習得研究における課題解決的な「タスク(課題)」と共通項があります。「タスク」⁽¹⁾には、「課題」という訳語が与えられていますが、「課題そのもの」を指す場合と、「課題解決すること」を指す場合があります。

また、プロジェクトには課題と共に「ゴール」もあります。課題に対して、児童が自分たちなりの具体的な課題解決の到達点を決めますが、この到達点が「ゴール」です。

◆……「英語の授業」の概念の払拭

小学校の教師や小学校英語研究者の多くは、自己の小学校時代には公立小学校において英語に関わる授業を経験してきていません。小学校で英語を扱う授業となると、対象者が年少者（低年齢）であることから、次々と音声を与えながら語彙指導したり、自らが受けてきた中学校段階のように特定の構文について指導した後、それを使ってみるといった指導法を思いつくことは自然です。

これまでも、多くの小学校でゲームや歌を用い

(1) 「人生はタスクの連続 (Life is a succession of tasks.)」と言ってよいと思います (高島 2009)。日常的に起こる1つ1つの課題を解決することが「タスク」ですから、プロジェクトは、タスクの集合体と考えられます。第二言語習得研究の「タスク」の定義に関しては、Ellis, R. 2003. *Task-Based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press. を参照してください。

て、児童の興味を喚起し、視覚に訴えたり、動作を交えたりして、繰り返しを多用し、英語の音声に自然に触れることができるような活動が実践されてきました。しかし、このような授業では、児童は、音を聞き発声はしていますが、指導者の言葉や与えられた表現をそのまま真似たり、繰り返したりして「言う」だけで、言葉を「使う」ことになっていないことがありました。言葉を「使う」ということは、話し手同士（あるいは、書き手と読み手の間）にある「情報の差を埋める」ことです。また、「英語活動は楽しく」「英語嫌いを作らない」といったことが謳われ、他の教科や領域では明確に示されている「授業の目標」が曖昧となり、本来、学校で行う授業の視点で授業内容や活動が考えられていない嫌いがありました。

これらの例はいずれも小学校の授業という視点からも、言語教育という視点からも適切とは言えません。図1に示すような順序の授業では、あいさつに始まり、What do you like? I like～などの表現を児童は「言う」のですが、英語で試みることで自分が目的となり、なぜ、この表現を外国語活動で扱わなければならないかが精査されていないと考えられます。

「何が好き？」と聞かれ、「バスケットボールが好き」と答えれば、当然、次に「なぜ?」「どんなところが?」「私も同じ」「私は、バスケットでなくてテニスが好き」「そのわけは…」などと

続く会話が自然です。しかし、図1のような授業内容では、表現を繰り返しているだけであって、使用する理由や目的が明確ではないため、表現や活動内容が児童の記憶に留まりにくくなります。

◆……外国語活動で求められる活動

学習内容や表現が記憶に残るためには、内容や表現そのものが児童にとって興味深いものであるということや、児童が主体的かつ積極的に授業に参加できたかが重要になります。そのためには、①児童が学びの主体として活動できる場の設定、②児童が興味・関心を持つ教材と提示の工夫、を考えなくてはなりません。また、授業の中では、必ず、児童と教師、児童同士がやりとりする場面があり、共に学びを作っていくことも重要です。

図1と対比して授業内容をプロジェクト的にしたものを紹介します。例えば、教師が、言語材料として月の名前や序数を取り上げたいと考えているとします。注意したい点は、カードや『英語ノート』を使って、月の名前と序数を教え、ゲームなどをして定着を図った後、“When is your birthday?” “My birthday is on ～.”と学級の友だち5人にインタビューして活動を終結しても、第6学年の児童にとってあまり興味深い活動とはならないことです。同じ学級にいるわけですから、誕生日を知りたい友だちからは既に日本語で聞いていますし、このような活動で友だちの誕生日を知るための必然性はありません。

しかし、図2のプロジェクト「My Story Bookを創ろう」のように、「卒業を前に自分の成長を振り返り、自分を表す絵本を創る」といった「課題」が与えられるならば、例えば、「自分のことを知らせるためには、自分の誕生日も知らせたい」という思いが起こり、そこから、月の名前や、日にちの言い方（序数）を知りたい（既に知っている場合は、使いたい）という気持ちが児童から出てきます。児童自ら教師に尋ねたり、自分で調べたりなどして絵本に組み込んでいくこととなります。「自分を表す絵本を創る」といった、自分と結びついたプロジェクトを設定することで、現実性のある授業を仕組むことができ、そこに英語を話す（使う）必然性が生まれてきます。

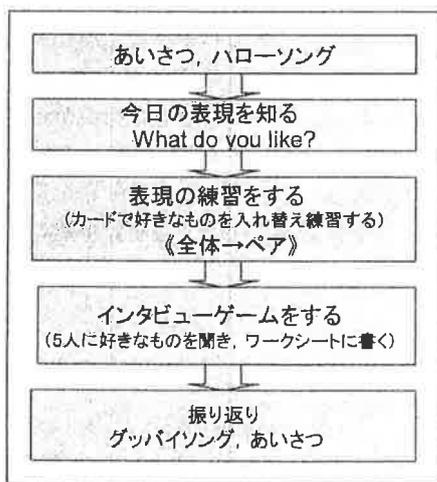


図1 従来の授業

PROJECT!

プロジェクトを1年間実施したものを集積すれば、年間の「プロジェクト型カリキュラム」(東野・高島 2007) となり、プロジェクトで行った外国語活動を「プロジェクト型外国語活動」と呼ぶことができます。図3はプロジェクトの流れを示しています。課題解決を通して、児童は自然に「英語を使って(しまって)いる」姿が理想的です。

プロジェクトの特徴としては以下の4点をあげることができます(東野・高島 2007; 高島 2009)。

- (1) 教師が一方向的に活動を決定したり、学習内容を与えたりするのではなく、教師が支援者となり、児童と共に作り上げていく。
- (2) 活動に、与えられた(あるいは見つけた)解決すべき課題(タスク)があり、この課題

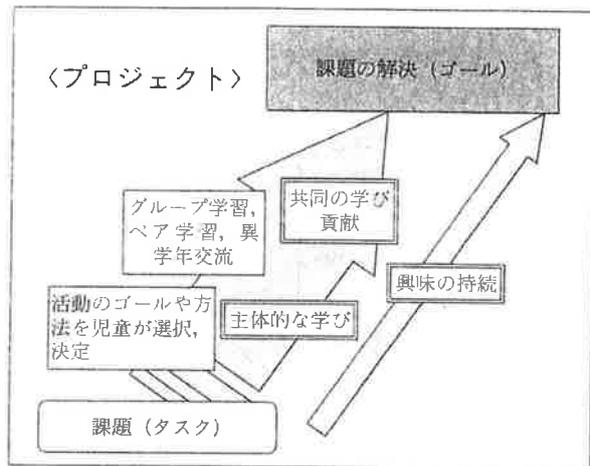


図3 プロジェクトの活動の流れ

(タスク)を解決する過程の中で、児童は必要な活動を選択し決定していくため、必然的に主体的・創造的な学びが生まれる。

- (3) グループ学習、ペア学習、異学年交流などを通して、児童は共同の学びを体験できる。
- (4) 課題を解決するという活動のゴールがあることで、児童は、明確な目的意識を持ち活動を進め、活動への興味を持続することができる。

プロジェクトには「課題」があり、それに対して児童が活動のゴールをどのようにするか決定し、そのゴールに向けて、課題を解決していきます。この過程で「英語を扱う」こととなります。

今回は、学習指導要領の外国語活動の目標を支える3本の柱を再確認します。そして、学習指導要領の目標を実現するための具体的なカリキュラムとして、「プロジェクト型カリキュラム」の年間計画とそれぞれのプロジェクトの作成の方法などを具体的に示すことにします。

◆参考文献

- 高島英幸. 2009. 「連載 小学校外国語活動はプロジェクトで! 学習指導要領に沿った活動のあり方」『英語教育』4月号~9月号.
- 東野裕子・高島英幸. 2007. 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.

(東野: 西宮市立高木小学校教諭
高島: 東京外国語大学教授)

単元目標

- ① *I LIKE ME!* の絵本を通して英語に関心を持ち、意欲的に My Story Book を創ろうとする。
- ② 自分の My Story Book を友だちに紹介したり、友だちの My Story Book の発表を聞き、自分自身のよいところや友だちのよいところに気づいたり、認めたりできる。
- ③ *I LIKE ME!* に出てくる言葉や簡単な表現を知り、絵本の読み聞かせを通して英語のリズムやイントネーションを感じる。

単元構想図

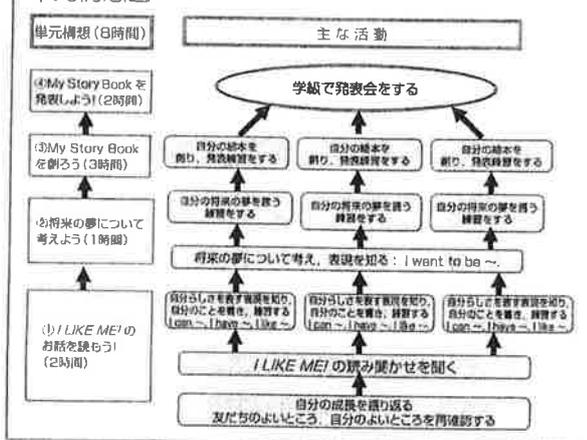


図2 プロジェクト「My Story Book を創ろう」の単元目標⁽²⁾と単元構想(第6学年)

(2) 「単元目標」は、プロジェクト全体の児童の達成目標、つまり、目指す児童の姿であり、裏返せば、教師が考える指導目標であり、児童につけたい力です。

学習指導要領の目標の柱とプロジェクト型 外国語活動の単元とカリキュラム

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

今回は、学習指導要領の目標の3つの柱について触れ、4月号で紹介したプロジェクト型の活動が学習指導要領に合致していることを確認し、カリキュラムの組み方などについて紹介していくことにします。

◆……目標の3つの柱

外国語活動の目標は図1に示すように3つの柱から成り立っています。これらの柱を踏まえた活動を統合的に体験することにより「コミュニケーションの素地を養う」という目的を達成することになります。小学校の場合、3つの柱が同じ太さではなく、図1に示すようなイメージで捉えることができ、コミュニケーション能力の態度の育成に重きがおかれます。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成は、とりわけ小学校段階では重視されていますが、中学校以降でも目的となっており継続性があります。また、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことは、スキルの習得を目的とした活動が中心となつてはいけないということで、図1では「スキルの」となっています。

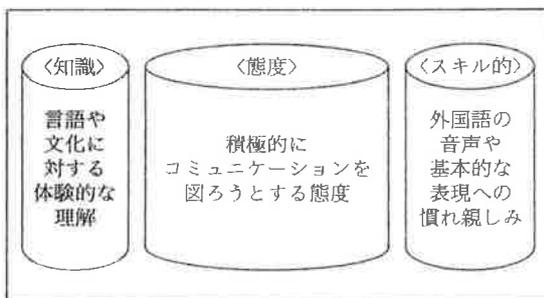


図1 外国語活動の目標を支える3つの柱のバランス

◆……小学校で育成するコミュニケーションの素地

コミュニケーション能力を服、中学校以降の英語教育をこの服の仕立てにたとえますと、小学校外国語活動で目標とされている「コミュニケーション能力の素地」は、服の材料となる生地であると考えられます(高島 2009)。小学校での外国語活動は、この生地作りをすることになります。生地を織る糸の材質、糸のつむぎ方、織り方によって生地の出来が変わるように、外国語活動の授業も、何を目標に、どのような教材を使って、いかに指導するか、また、児童がどのような活動をするかなどによって、育成される「コミュニケーション能力の素地」が変わり、中学校の英語教育への良い基盤になるかどうかに関わってきます。

◆……カリキュラム、プロジェクト作成の視点

児童が主体的・創造的に活動できるような単元をプロジェクトと言い、これを集積すると年間カリキュラムとなります。プロジェクトや年間カリキュラム作成にあたっては、次の4点を考える必要があります。

- ① ゲーム・歌・クイズなどの児童の興味づけや関心を高める活動は、音声面の基盤作りの目的として選択する。
- ② 活動は発信型を中心とし、伝え合う力を協同の学びを通して育成できる活動とする。
- ③ 授業中に児童が自己評価、相互評価ができる場面を設定する。
- ④ 学級担任は支援者となり、英語に関しては、必要に応じてALTなどの専門家に応援を求め、児童が中心で積極的に関わることのできる授業構成とする(東野・高島 2007)。

◆……プロジェクト(単元)の組み方

年度当初や1つのプロジェクト終了時に児童のニーズを調査したり、児童の英語経験、『英語ノート』などを参考に、個々のプロジェクトを決めていくこととなります。その際には、まず、そのプロジェクトの目標を明確にする必要があります。「友だちと数多くやりとりし、英語を使う楽しさを味わう」、「日本文化を異文化と比べながら紹介する」、「文字に触れる活動を通して、文字に興味を持つ」などです。これと並行して、または、この後に、課題を決める必要があります。つまり、何のためにその活動をするのか、児童の必然性や現実性に照らしながら、「日本文化を紹介しよう」、「グリーティングカードを作ろう」などの課題を決定していきます。課題と関連付けながら、最終的にどのような活動をするかを決めていきます。児童の英語経験や年間を見通して言語材料を決め、その後、活動の詳細や各時間の流れを考えていくこととなります。

「日本文化を異文化と比べながら紹介する」を例に取りますと、目標に応じて、何を、どのような形で、誰に発信するのかということによって最終的な活動が決まります。これに加えて言語材料をどうするか決めていくことで単元を構想していくことができるのです。表1のような表を作っているいろいろな可能性を探ってみます。何をどのような方法で誰に紹介するかは、児童に考えさせ、一緒にプロジェクトを考えることもできますし、児童から先に希望を取り、ある程度教師が制約を加えることもできます。

例えば、社会科で歴史学習が終わり、オープンスクールという地域の人が集まる機会⁽¹⁾があるとします。この場合は、教師は発信相手を前もって

表1 プロジェクト作成メモ

| 何を | どんな方法で | 発信相手 |
|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・書道/華道/茶道 ・スポーツ(相撲/柔道) ・文字/文学 ・歴史 ・着物/身につけるもの ・建物(寺/神社/城) ・アニメ | <ul style="list-style-type: none"> ・実物を見せながら ・ビデオにとって ・実演して ・写真や絵を使って | <ul style="list-style-type: none"> ・異学年 ・地域の人/地域の外国人 ・保護者 ・姉妹校の友だち ・中学生 |

「地域の人（外国人も含む）」と決め、「地域の人（外国人）に日本文化を紹介しよう」と課題を与えます。この課題を受け、児童が「日本文化って何だろう」「茶道とか相撲などもそうかな」「寿司やお刺身は日本の食文化だね」「お寺や神社、お城もそうかな」「もっと詳しく調べなくちゃ」「英語でなんていうの」「英語を練習しなきゃ」「どんな方法で紹介しようか」「何を準備しようか」などと考え、活動計画を立てていきます。

この計画が、次のような単元の流れとなります。

- ① 日本文化について考えよう
- ② 日本文化を調べよう
- ③ 日本文化紹介に使う英語を知り練習しよう
- ④ 日本文化紹介の準備をしよう
- ⑤ 日本文化を紹介しよう

◆……カリキュラムの組み方

実践してみたいプロジェクトがいくつか決まると、次に35時間の年間計画を立てる必要があります。第5・6学年の2年間を見通して考えていくことは当然ですが、プロジェクト同士の活動内容や方法が偏らず、言語材料は、既に学習したものを再度使いながら、新たなものを少し入れていくように配慮していく必要があります。活動方法やテーマが重ならないようプロジェクトを内容や方法で表2のように大きく3つの型に分けておき、それがバランスよく入るように考えていくことも1つの方法です。

また、各プロジェクトの合間に短い時間や年度初めや学期末などの2～3時間を使って実施できる「ミニプロジェクト」も必要に応じて入れていきます。1度に35時間分の年間計画を作成することが難しい場合には、教師がこれは絶対させたいと思うもの、あるいは、児童から強い希望があるものなど、各学年1つか2つメインになるプロジェクトから決めていくと、年間の計画をスムーズに立てることができます。

表3は、3つの型のプロジェクトごとに単元の

(1) 新たな発信相手を常に考え授業を計画していくことは、年間行事や時間的に負担がかかることがあります。例のように、参観日やオープンスクール、児童会の縦割りグループなど従来あるものを利用する単元もあると計画が立てやすくなります。



表2 プロジェクトの型 (東野・高島 2007参照)

| 絵本型プロジェクト | 発表・発信型プロジェクト | 相互交流型プロジェクト |
|---|---|--|
| 絵本や紙芝居などを題材とする。このプロジェクトは、主に、英語絵本を題材とし、その絵本の表現を言語材料とする。登場人物を変える、話の続きを作るなどの創作活動や劇やペーパーパートを用いた表現活動を含む。 | 紹介・案内を題材とする。このプロジェクトは、プロジェクトの課題が紹介や案内になっており、課題のゴールとして、聞き手に紹介や案内をする。発表やプレゼンテーションを行う。 | 買い物など相互交流することで課題を解決する。課題のゴールが買い物など、様々な場面において相互に対話することが必要となる場を設定する。 |

組めそうな題材(トピック)、活動方法、あるいは、発信相手などの可能性を示したものです。

例えば、第5学年では絵本の読み聞かせをすることに決めたとします。活動方法が決定しているので、使用できる絵本から児童の英語経験などから、*Whose Nose and Toes?* が適当であると考えます。発信相手を決め、プロジェクトとして決めると、5年のどの時期にするのが適当かを考えます。発信相手が2年生であるとすれば、「2年生に英語のお話を聞かせてあげよう」とプロジェクト名が決まります。クラス作りを兼ねてグループ活動をさせたい場合は、1学期に入れます。そうすると表4の1学期のところに「2年生に英語のお話を聞かせてあげよう」が入ります(①)。これは8時間程度でできる活動なので、1学期にはあと4時間程度の活動ができることになります。2つ目のプロジェクトとしては相互交流型から「高木マーケットでお買い物をしよう」を『英語ノート』の言語材料と関連付けながら学習させた

いと考え、3学期に入れます(②)。2学期は、内容や方法のバランスを考え、発表・発信型のプロジェクトを実施したいことと、国際理解学習の視野と『英語ノート』の関連から世界の料理を題材として扱いたいと考え、「世界の料理を調べ紹介しよう」を入れます(③)。

表4 年間カリキュラム

| 学期(時間数) | プロジェクト名 |
|-----------|-----------------------------|
| 1学期(12時間) | 自己紹介をしよう(1時間)④ |
| | 2年生に英語のお話を聞かせてあげよう(8時間)① |
| | アルファベットを使ったことばを見つけよう!(3時間)⑥ |
| 2学期(14時間) | 世界の料理を調べ紹介しよう(7時間)③ |
| | ボードゲームを作って遊ぼう(7時間)⑤ |
| 3学期(9時間) | 高木マーケットでお買い物をしよう(9時間)② |

残った時間数や児童のニーズや言語材料などを考え、④⑤⑥のプロジェクトを時間数を考慮して順次入れていきます。このようにして、年間35時間の年間カリキュラムができるのです。

1学期が終わった時点で、実施したプロジェクトが適当であったかを児童の反応や自己評価から、また、授業の進め方など教師の授業評価からも振り返り、年間計画を見直し、修正を加えます。2学期が終わった時点でも同じように修正し、1年間のカリキュラムを実施していくことになります。

次号(6月号)では、第5・6年の年間カリキュラムを『英語ノート』と関連付けながら提案し、実際にプロジェクトをどのように進めていくか、教材例やワークシートなどを紹介します。

◆参考文献

西宮市教育委員会・小学校英語活動研究推進委員会.
2009.『西宮市立小学校英語活動実践の手引』
高島英幸. 2009.「連載 小学校外国語活動はプロジェクトで! 学習指導要領に沿った活動のあり方」
『英語教育』4月号~9月号.
東野裕子・高島英幸. 2007.『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.
(東野:西宮市立高木小学校教諭
高島:東京外国語大学教授)

表3 プロジェクトの構想

| 絵本型プロジェクト | 発表・発信型プロジェクト | 相互交流型プロジェクト |
|--|--------------|---------------|
| 題材として使用できる絵本 | 最終的な活動 | 紹介するものの例 |
| <i>Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?</i> | 異学年への読み聞かせ | 家族紹介 |
| <i>Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?</i> | 絵本や続きを作る(創作) | 学校紹介 |
| <i>From Head to Toe Whose Nose and Toes? Where's Spot?</i> | 発表会 | 地域紹介 |
| | | 道案内 |
| | | 校内の異 |
| | | 遊び紹介 |
| | | 学年 |
| | | 世界料理紹介 |
| | | 保護者 |
| | | 近隣・地域の小学 |
| | | 校、中学校 |
| | | 校 |
| | | 外国の姉妹校 |
| | | 候補名 |
| | | 買い物をしよう |
| | | 海外旅行しよう |
| | | ボードゲームを作って遊ぼう |

プロジェクトの進め方 ①

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

今回は、第5・6学年に配布されている『英語ノート』を活用したカリキュラム例を示すとともに、1つのプロジェクトを取り上げ、その進め方やワークシートについて解説します。

教科、領域にかかわらず、単元全体や1時間には明確な目標が設定されます。授業は目標の達成のためのプロセスですが、教師が一方的に教え込むものでも、児童が勝手に活動するものでもなく、教師と児童が共に作りあげていくものです。その中で、児童は、考えたり、創作したり、表現したりしながら変容していき、そのプロセスにおいて児童と教師、児童同士のやりとりは不可欠です。

◆……『英語ノート』指導資料にそった授業の課題

『英語ノート 1』の「L.9 ランチ・メニューを作ろう」の指導資料の展開例を見ると、①あいさつ、②語彙の復習、キーワードゲームをする、③ランチの作り方を知る（What would you like ~? I'd like ~. の表現の提示）、④チャンツを言う、⑤自分の欲しい食べ物や料理を言う、⑥振り返り、という流れとなっています。この授業展開では、「丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり、答えたりする」目的はありますが、何のためにランチメニューを作るのか、あるいは、最終的な活動で児童が選んだ料理をいかに活用するかなど、活動に課題がありません。児童は、“What would you like ~?” “I'd like ~.” と音声を出しますが、聞き手と話し手の間にわずかな情報（量）の差はあったとしても、お互いに何を尋ねているのか、尋ねられているのか分かっていますので、コミュニ

ケーションをしているとは言えません。また、ランチメニューを作るという児童の現実にはあまりない場面設定であることや、英語を使う必然性もないなど、多くの課題が見えてきます。

『英語ノート』は、1教材として、児童や地域の実態に照らして作成された学校独自、あるいは、自治体単位のカリキュラムなどに組み込んで使うことが現実的であり、有効であると言えます。

◆……『英語ノート』を活用したカリキュラムとプロジェクト例

学校独自のカリキュラムに、『英語ノート』の1と2を組み込んだカリキュラム例が表1です。

このカリキュラムの中から、先月号でも紹介した、第6学年の「日本文化を紹介しよう」を取り上げます。単元構想と目標、時間数は表2に示しています。以下、単元の流れについて説明します。

① 日本文化について考えよう

単元の導入として、「オープンスクールで日本文化を外国の人や地域の人、家の人に紹介しよう」という課題設定をした後、「日本文化とは何か」について、『英語ノート 2』の Let's Enjoy 3 の「世界に発信する日本の文化」も参考にしながら考えます。5月号で紹介したもの以外に、書道や和歌といった伝統的な日本文化や、「四季を生かして生活している」などの日本に特徴的なこと、『ICT 産業の発達』など現代の日本を象徴するようなものが出てくることが予想されます。この中からクラスやグループで紹介するもの・ことを決めていきます。

表1 カリキュラムと「英語ノート」との関連(例)

| 学年 | プロジェクト名 | 時間数* | 『英語ノート』 (①は『英語ノート1』 ②は『英語ノート2』 を示す) |
|--|--|------|---|
| 5年 | 自己紹介をしよう | 2 | ①L.1 世界の「こんにちは」を知ろう ①L.4 自己紹介をしよう |
| | 2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう (絵本 <i>Whose Nose and Toes?</i>) | 8 | ①L.7 クイズ大会をしよう |
| | 高木マーケットでお買い物をしよう | 6 | ①L.3 数で遊ぼう ①L.5 いろいろな衣装を知ろう |
| | 世界の料理を調べ、レシピを作ろう! | 8 | ①L.9 ランチ・メニューを作ろう |
| | ボードゲームを作って遊ぼう! | 7 | ①L.8 時間割を作ろう |
| 6年 | アルファベットを使ったことばを見つけよう! | 4 | ②L.1 アルファベットで遊ぼう ②L.2 いろいろな文字があることを知ろう |
| | アルファベットを復習しよう | 2 | ②L.1 アルファベットで遊ぼう ②L.2 いろいろな文字があることを知ろう |
| | 地図を使って自分の家を紹介しよう | 7 | ②L.5 道案内をしよう |
| | 日本文化を紹介しよう | 8 | ②Let's Enjoy 3 世界に発信する日本の文化 |
| | 1年生に絵本の読み聞かせをしてあげよう (絵本 <i>Dear Zoo</i> など5種類) | 6 | ②L.8 オリジナルの劇をつくろう |
| | グリーティングカードを作ろう1 (季節の挨拶をしよう, Christmas & New Year カードを作ろう) | 2 | |
| | My Story Book を創ろう! (わたしの夢, ぼくの夢) (絵本 <i>I Like Me!</i> を使って) | 8 | ②L.4 できることを紹介しよう ②L.6 行ってみたい国を紹介しよう ②L.9 将来の夢を紹介しよう |
| グリーティングカードを作ろう2 (Thank You カードを作ろう) | 2 | | |

*時間数は、活動内容によって変動します。

② 日本文化について調べよう⁽¹⁾

自分達が紹介するものについて、本やインターネットを使って調べます。児童には、日本文化に対するさまざまな発見があります。書道などのように「中国から伝わって発展したものだった」ということに気づいた後、書道の歴史や字体などを

表2 第6学年 「日本文化を紹介しよう」(全8時間)

| | |
|------|---|
| 単元目標 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域に住む人や ALT, 外国人を意識し、日本文化を伝えるためにどのような発表にするかをグループで話し合うことができる。 ○ 社会科や総合的な学習の時間で学んだことを生かしながら、グループで協力し、日本文化を紹介することができる。 ○ 日本文化を伝えるために紹介に使う英語表現や自分達の追加したい英語表現を知り、積極的にコミュニケーションをしようとする。 |
| 単元構想 | <ul style="list-style-type: none"> ① 日本文化について考えよう (1時間) ② 日本文化について調べよう (1時間) ③ 日本文化紹介に使う英語を知り練習しよう (2時間) ④ 日本文化紹介の準備をしよう (2時間) ⑤ 日本文化を紹介しよう (2時間) |

詳しく調べるグループもあります。「他の国にも似た楽器がある」と気づいたグループは、三味線などのように、ルーツは同じでも、それぞれの国に伝わり、歴史や生活様式に合わせて変わっていった三弦の伝播を通して、外国との繋がりを知ったり、文化を比較したりすることができます。

このように、第6学年の知的レベルに合った題材と調べ学習を組み合わせることで、児童の意欲を喚起し持続させることができます。

③ 日本文化紹介に使う英語を知り練習しよう

最初は、ALT や担任に続いて、書道や華道、相撲やひな祭りなど10種類ほどの写真をカードにしたものを使うなどして一斉に練習します。その後、ペアやグループに分かれて音声録音やカードを使って自分達の計画にそって練習していきます。また、カードゲームやビンゴゲームなどをしながら、表現の定着を図ることもできます。

ここでは、紹介に使う基本的な英語表現(例えば, "This is ..." "(It's) popular." "I like it, because (it's) fun.")を知り、練習することになります。日本文化や日本的なもの・ことを説明する言い方として interesting や beautiful など、児童自らが言いたいことを訳したものを中心に提示

(1) 外国語活動の時間は年間35時間なので、調べ学習は1時間程度が適当です。「総合的な学習の時間」に「日本らしさを紹介しよう」「日本の文化を調べて発表しよう」などの単元を設定し、時間をかけて調べ学習ができると、より知的好奇心が高まったり、外国人や地域の人に伝えたいというモチベーションが高まります。このように総合的な学習の時間とリンクすることができると、プロジェクトの内容がより充実したものになります。

し練習していきます。この時にも、日本語を書いたカードと英語の音声を結びつけるようなゲームを多用します。

その後、基本表現以外に付け加えたい説明をグループで2～4文、日本語で加えます。日本語はなるべく簡単なものにし、これを既習の表現を中心に、児童に無理のない程度の英語表現でALTなどが中心に英訳します。そして、この表現もグループで練習します。

④ 日本文化紹介の準備をしよう

わかりやすく紹介するための写真や図・絵などの資料を準備したり、書道や華道など実演できるものは、実演の準備をしたりして、英語表現と一緒に練習をします。

⑤ 日本文化を紹介しよう

発表は、それぞれのブースに分かれ、ワークショップ形式で行います。聞き手が何人か集まると紹介する方法で発表します。前半と後半というように発表を分担し、発表しない時には、他の分野やクラスの紹介を聞きに行きます。時間内に、何度も発表の機会があることで、前回の反省を生かし、よりよいものにしていくことができます。英語を聞いてもらうことや、英語の説明に対する反応がすぐに返ってくることなど、児童にとって直接交流することで真のコミュニケーションを体験することができます。また、聞き手に外国人がいれば、英語を話す必然性も生まれてきます。

授業を終えた児童の感想として、「たくさんの人に聞いてもらえてとても満足した。」「外国人がコメントをくれたときには英語が通じたと実感した。」などがあり、このプロジェクトを通して、達成感や自分達の英語が通じた喜びを感じることができました。

英語を用いなければならない環境や場を設定して、話さなければならない必然性を持たせ、より意欲的に取り組めるようにプロジェクトを構成することで、児童は有意義な時間を体験できます。

◆……ワークシートの利用

「日本文化を紹介しよう」では、ほぼ毎時間、

以下のワークシートを使います。これには2つの役割があり、活動を進めていく際の思考の整理と、英語表現を発話するための補助手段です。後者では、表現したいことを日本語で書いておくことが、英語の表現の際の手助けとなります。

| |
|---|
| <p>◀ワークシート例▶ 日本文化を紹介しよう ④ 6年 組</p> <p>☆ 紹介するテーマ (例: 日本料理)</p> <p>☆ 紹介するテーマのうち紹介するものの詳細を書きましょう。 (例: すしとてんぷら)</p> <p>☆ 紹介するものについて調べましょう。</p> <p>☆ 日本文化紹介のシナリオを日本語で作り、英語で通ってみましょう!</p> <p>() これは何ですか? ① これは、 　　　　　　　　　　です。 ② 有名です。/人気があります。(よく知られています。) ③ 私は、 　　　　　　　　　　が好きです、 ④ なぜなら 　　　　　　　　　　からです。 ⑤ ⑥</p> <p>() これは何ですか? ① これは、 　　　　　　　　　　です。 ② 有名です。/人気があります。(よく知られています。) ③ 私は、 　　　　　　　　　　が好きです、 ④ なぜなら 　　　　　　　　　　からです。 ⑤ ⑥</p> |
|---|

7月号では、今月に続き、プロジェクト型外国語活動におけるプロジェクトの具体的な進め方を見ながら、絵カードなど教材づくりやその利用法、教材の整理法について紹介します。また、前述の自己評価の詳細については、8月号で紹介します。

◆参考文献

高島英幸. 2009. 「連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で! 学習指導要領に沿った活動のあり方」『英語教育』4月号～9月号.

東野裕子. 2010. 「児童が主体的に取り組む外国語活動を目指して一課題解決型の外国語活動の実践を通して」『まど』No. 84. pp. 71-73. 西宮市教育委員会.

(東野: 西宮市立高木小学校教諭
高島: 東京外国語大学教授)

プロジェクトの進め方 ②

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

6月号では、第5・6学年に配布されている『英語ノート』を活用したカリキュラム例を示し、プロジェクト「日本文化を紹介しよう」を取り上げ、その進め方やワークシートについて解説しました。今月号では、実際にプロジェクトを進めていく上での教材準備、作成、整理について具体的に紹介します。

これまでに英語活動や外国語活動を積極的に進めてきた学校では、絵カードや掲示物など、たくさんの教材があると思います。これらを整理し活用していくことで、プロジェクト型の外国語活動でも、ほとんど負担なく教材準備をすることができます。一方、今までにあまり実施してこなかった学校でも、今回ご紹介する一冊の絵本や画用紙などを用いて効率よく教材作りをすることは、教師の負担を軽減するという点からも重要です。

◆……プロジェクトの例と教材作り

今回は、4月号の「小学校外国語活動で求められる活動」の解説で取り上げた、第6学年の「My Story Book を創ろう」(全8時間)を例として考えていきます。単元目標と単元構想は以下の通りです。『英語ノート』と本プロジェクトとの関連は6月号で触れています。

単元目標

- ① *I LIKE ME!* の絵本を通して英語に関心を持ち、意欲的に My Story Book を作ろうとする。
- ② 自分の My Story Book を友だちに紹介したり、友だちの My Story Book の発表を聞き、自分自身や友だちのよいところに気づい

たり、認めたりできる。

- ③ *I LIKE ME!* に出てくる言葉や簡単な表現を知り、絵本の読み聞かせを通して英語のリズムやイントネーションを感じる。

単元構想

- ① *I LIKE ME!* のお話を読もう
- ② 将来の夢について考えよう
- ③ My Story Book を創ろう
- ④ My Story Book を発表しよう

単元構想①の「*I LIKE ME!* のお話を読もう」では、まず、「自分を表す絵本作りをする」という課題をつかむために、絵本の読み聞かせを聞き、絵本作りを使う表現を練習します。このためには、*I LIKE ME!* の大型絵本、あるいは、パワーポイントによるスライドショーなどを用いたり⁽¹⁾、表現の練習をするための「絵カード」が必要となります。ここでは、自分の誕生日、好きなこと、持っているもの、できることの表現が出てきますので、それぞれのカテゴリーごとに絵カードを準備します。ここで取り上げた「できること」は、『英語ノート 2』の Lesson 4「できることを紹介しよう」の児童用図書や絵カードを利用することもできます。表1に、必要な教材である大型絵本、スライド、絵カードの作り方と留意点を示します。

次に、単元構想②の「将来の夢について考えよう」では、職業の言い方を知り、“I want to be a teacher.” など、自分のなりたい職業を言えるよ

(1) 絵本をスキャンした画像ファイルをマイクロソフト社の Microsoft Office PowerPoint® に取り込んで、教室にあるテレビ画面や大型画面で1枚ずつ提示していく方法です。1枚1枚スライドのように表示する方法をスライドショーと呼びます。

うに練習します⁽²⁾。ここでは、最初に職業名を知るときにクラス全体で使う絵カードの他に、表現を聞いたり、言ったりして定着を図るためにカードゲームを取り入れますので、このときに用いる「小型カード」もグループに1セット必要になります。これを使って、カルタゲームをしたり、マッチングゲームをしたりします。束にしたカードを裏返しにし、グループで一人ずつ順番に取っていき、描かれている職業を言っていくといったゲームもできます。また、指導者が職業名を言って、児童がカードを取り合うだけではなく、“This boy wants to be a pilot.”、“My mother is a nurse.”など、カードに描かれていることを文で表現されたものを聞き、言われた文に含まれている職業のカードを取る工夫も可能です。

小型カードは、絵カードと同様に、それぞれのプロジェクトに出てくる言語材料に合わせて作成しておくことで、表現の練習や定着に使うことができます。図1に小型カードの例を示しています。

絵カードや小型カードは、市販のものもたくさんありますが、必要な表現や単語が一部そろっていないかったり、絵や写真にインパクトや現実味がないなど、そのままでは使えないものがあります。この場合には、プロジェクト(単元)ごとに、スライド、絵カード、小型カードなどを手作りする



図1 小型カードの例
 (『英語ノート 2』pp.62-63より)

(2) 他の表現との関係などで、「～になりたい(したい、欲しい)」という定型表現として、最初から、“I'd like (to be a teacher).”という、より自然な自己表現を導入することも可能です。
 (3) 紙面の都合で、「活動③ My Story Book を作ろう」、「活動④ My Story Book を発表しよう」の教材については省略しています。

表1 第6学年のプロジェクト「My Story Book を創ろう」に必要な教材、教材の作り方と留意点

| 活動 ⁽³⁾ | 教材 | 教材の作り方と留意点 |
|----------------------------------|---|---|
| ① I LIKE ME! のお話を読もう | 大型絵本 《学年に 1冊準備》 | <ul style="list-style-type: none"> 1 ページをA3サイズに拡大する。 A3の大きさに切った画用紙に貼り付けるか、ラミネートをして、幅10センチほどの透明なテープを使って製本する。 あるいは、それぞれのページに穴をあけ、リングを通して製本する。リングであれば、必要に応じて、リングをはずしてカードとして利用できる。 |
| | スライド | <ul style="list-style-type: none"> それぞれのページをスキャンし、パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトに貼り付け提示する。 可能であれば、文字の部分を消したり、随時出るように加工したりして、ALTなどに録音してもらった音声と一緒に取り込んでスライドを作成する。これによって、担任一人で授業をするときも音声に関する負担なく進めることができる。 |
| | 絵カード (月、食べ物、スポーツ、楽器の絵) 《クラスに 1セット 準備》 | <ul style="list-style-type: none"> B5～A4サイズで、ワード(Word)などで枠を作成しておき、いつも同じものを使うようにすると便利である。 枠の中にデジタルカメラで撮った写真、スキャンした絵、あるいは、インターネットの無料サイトから取り出した絵や写真などを取り込み、枠外にそれぞれの単語の文字も示す。その際、文字は、教科書体など子どもが書く文字に近いものを選ぶ。(例えば「a」ではなく「a」となるようにする。) |
| ② 将来の夢を考えよう | 絵カード (職業の絵) 《クラスに 1セット 準備》 | <ul style="list-style-type: none"> B5～A4サイズの枠内に『英語ノート』の挿絵などから絵を取り、文字を入れ作成する。 |
| | 小型カード (職業の絵) 《グループ に1セット 準備》 | <ul style="list-style-type: none"> A4を縦4つ、横2つの市販のラベル(シールになったもの)に合わせて8つに分け、8枚の小型カード(5cm×8cm)が作れる枠を作っておく。 そこに絵と、言葉を入れ、小型カードを作成し、ラベルに印刷する。厚さ2～3ミリのボール紙(白表紙)を同じ大きさ(5cm×8cm)に切り準備する。(これは教材店などで切ってもらおうと形が揃い、仕上りもきれいになる。) そこに印刷した絵を貼っていく。 |



ことで、自校独自のカリキュラムに合ったものを揃えることができます。

◆……教材の整理方法

教材は、プロジェクト（単元）ごとにまとめておく必要があります。図2のように、中の見えるキャリーケースを揃えて、プロジェクトごとに絵カードや小型カード、活動案など、必要なものを入れておきます。

例えば、動物カードは、6月号のカリキュラム例で挙げた第5学年の「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」や第6学年の「1年生に絵本の読み聞かせをしてあげよう」などの複数のプロジェクトに使うことができます。しかし、共通して1組のカードを使うのではなく、複数組準備してそれぞれのケースに入れて整理しておきます。こうすることで、1つのプロジェクトを進めるときには、授業に必要な教材をすべて、ひとまとめにして持ち運びできます。



図2 絵カード、小型カード、キャリーケース
（『英語ノート 2』p.56より）

ここまで、絵カードや小型カードの作り方とこれらのカードを使った表現の定着などを図るためのゲームを紹介してきました。

◆……プロジェクトに使う歌、ゲームの紹介

プロジェクトを進めていく中で、英語表現の提示、練習、定着を促進するものとして、ゲームだけでなく、歌やチャンツなどを取り入れることで、楽しみながら学習できます。表2は、第3～6学年のカリキュラム例の中の一部のプロジェクトに

表2 各プロジェクトと関連のある歌やゲーム例（☆ゲーム、♪歌、◎チャンツ）

| 学年 | プロジェクト名 (使用絵本) | 歌、ゲーム、チャンツなど |
|-----|---|---|
| 3学年 | スポットの紙しばいをつくろう (Where's Spot?) | ♪ London Bridge is Falling Down ♪ The Bag Song ☆前置詞ゲーム ☆動物の鳴き声クイズ ☆動物ジェスチャーゲーム ☆「ボンゴ」ゲーム ☆オリビエの部屋の絵を書こう |
| 4学年 | 〇〇さがしの世界旅行に出かけよう (Have You Seen My Cat?) | ♪ The Wheels on the Bus ☆Country Basket ☆ワールドクイズ ☆見なかった?クイズ |
| 5学年 | 2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう (Whose Nose and Toes?) | ♪ Head, Shoulders, Knees and Toes ♪ Dem Bones ♪しあわせなら手をたたこう ☆スリーヒントゲーム (動物) ☆ジェスチャーゲーム ☆Simon Says ゲーム ☆体の部位ビンゴ ☆Yes / No ゲーム ◎What's This? |
| 6学年 | 1年生に読み聞かせをしよう (Dear Zoo, The Teddy Bear など) My Story Bookを創ろう (I LIKE ME!) | ♪ Old McDonald Had a Farm ☆動物鳴き声、擬態語クイズ ☆マッチングゲーム ♪ Can He Climb an Apple Tree? ☆インタビューゲーム |

(東野・高島 2007:19参照)

ついて、どのようなゲーム、歌、チャンツが使えるかを示しています(第1～2学年に関しては、紙面の都合で割愛しています)。

8月号では、実際に授業を進める中で行う評価について、観点や評価規準、評価の実際について紹介します。

◆参考文献

高島英幸. 2009. 「小学校外国語活動はプロジェクトで! ③ プロジェクト型カリキュラム作成のための視点と具体例」『英語教育』6月号 pp.54-57.
東野裕子・高島英幸. 2007. 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.
文部科学省. 2010. 『英語ノート 2』

(東野: 西宮市立高木小学校教諭
高島: 東京外国語大学教授)



プロジェクト型外国語活動における評価

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

7月号では、プロジェクトのテーマに沿った教材作りや英語表現の定着を図るゲームなどを紹介しました。今月号では、評価について検討します。

外国語活動は小学校教育課程において「領域」として位置づけられましたが、指導目標と評価は授業である限り不可欠です。評価は、新学習指導要領の告示に伴い、移行期であっても第5・6学年で英語を扱う場合は「外国語活動」とするため、総合的な学習とは別に評価するように通知されています⁽¹⁾。評価の観点については、各学校で決定し、それに沿って評価し、最終的には評価を記述で示すことになっています。

◆……見通しと振り返り

学習指導要領の総則には、小・中学校ともに「児童（生徒）が学習の見通しを立てたり振り返ったりする活動を計画的に取り入れる」と示されています。これは外国語活動に限らず、学習を進めていく過程で、教師も児童もそれぞれの単元の目標を理解し、最終的なゴールがわかり、それに対して見通しを持って進めていくことが重要であることを表しています。また、見通しを持ち学習を進める過程で、振り返り（自己評価）をしながら、学習計画を修正し、新たな見通しを持って進めていくことも大切です⁽²⁾。教師は、この過程でそれぞれの活動を総括的ではなく、形成的に評価し、次の活動への意欲を喚起し、しなければならないことを明確にする必要があります。ひいてはこのことが、児童の興味・関心の持続に繋がります。

◆……評価の観点と評価規準

教師が授業を通して児童を評価していくためには、評価の観点と評価規準を設定する必要があります⁽³⁾。本連載の5月号で触れましたが、学習指導要領の外国語活動の目標は3つの柱から成り立っており、評価は、この目標の柱に沿ってなされます。評価の観点は、①活動や異文化に対する「関心・意欲・態度」、②聞くこと・話すことに関わる力や他者と交流する力としての「コミュニケーションの力」、③「言語や文化に関する気付き・理解」の3つとなります⁽⁴⁾。

それぞれのプロジェクト（単元）にはこの3観点に関する評価規準が必要となります。評価規準は、プロジェクトを計画する際に、教師も児童も見通しを持って活動を進められるように、各プロジェクトや各活動の目標を具現化したものを示しておく必要があります。表1は6月号で紹介した第6学年のプロジェクト「日本文化を紹介しよう」（全8時間）の評価計画です。左端に時間、

(1) 第3・4学年では、従来のように総合的な学習の時間の中の「英語活動」として単独で行うことはできなくなりました。しかし、新学習指導要領の総合的な学習の時間の趣旨に合い、総合的な学習の時間の単元に位置づけて、一部英語を扱うことが可能であるため、「英語を扱う活動」は、総合的な学習の時間の中で評価することになります。

(2) 高島（2010：183）は、「フィードフォワード」という用語を援用し、「見通し」は教師や生徒（児童）が今後の目標や課題を考え、到達すべき姿を描くこと、これに対して「フィードフォワード」は「フィードバック」「振り返り」「見直し」を踏まえた、生徒（児童）自身の次の学習への行動力であるとまとめています。

(3) 評価は、教師自身による授業に対する授業評価もありますが、ここでは、児童に対するものに限定します。

(4) それぞれの観点の詳細については、東野・高島（2007）に示しています。

表1 第6学年「日本文化を紹介しよう」(全8時間)の評価計画

| 時間 | 各活動 | 評価規準 | | | 評価者 | 評価方法 (評価の対象) |
|--------------------|-------------------------------|--|--|-------------------------------|----------|------------------------|
| | | 関心・意欲・態度 | コミュニケーション の力 | 言語や文化に関する 気づき・理解 | | |
| 1 時間目 | ① 日本文化について考えよう | 日本文化に関心を持つ。 | | | 教師 | 観察(発表) アンケート |
| | | | グループで話し合っ て自分たちの紹介す るトピックを決める ことができる。 | | 教師 | 観察(話し合 い) |
| | | | | 日本文化の特徴に気 づく。 | 教師 | ワークシート |
| 2 時間目 | ② 日本文化について調べよう | 自分たちが紹介する トピックを本やイン ターネットで調べよ うとする。 | | | 教師 | 観察(調べ学 習) ワークシート |
| | | | グループで話し合っ てワークシートをま とめる。 | | 教師 | 観察(話し合 い) ワークシート |
| 3 時間目 | ③ 日本文化紹介に 使う英語を知り練 習しよう | 積極的に紹介に使う 英語を練習しようと する。 | | | 教師 | 観察(練習) |
| | | | ALT や担任に基本 表現を聞くことが できる。 | | 教師 | 観察(活動) |
| | | | | 基本表現に使われ ている英語を知る。 | 教師 自己 | 観察 振り返りカード |
| 4 ~ 6 時間目 | ④ 日本文化紹介の 準備をしよう | | 聞き手にわかるよう に工夫する。 | | 教師 | ワークシート |
| | | 積極的にシナリオを 作ろうとする。 | | | 教師 | 観察(活動) |
| | | | | 基本表現以外の英語 を知る。 | 教師 | ワークシート |
| | | | グループで協力して 英語表現を言ったり 聞いたりできる。 | | 教師 | 観察(練習) |
| 7 ~ 8 時間 | ⑤ 日本文化を紹介 しよう | 発表の視点を意識し ながら、意欲的に発 表しようとする。 | | | 教師 | 観察(発表) |
| | | | | 友だちが発表する基 本表現以外の英語を 知る。 | 教師 相互 | 観察(発表) 相互評価カード |
| | | | 他のグループによか ったところやわかっ たことを伝えること ができる。 | | 教師 相互 | 観察 相互評価カード |

次に小活動名、そして、活動ごとに3つの観点で評価する評価規準、さらに、評価者、評価方法として、どのように評価するのかを示しています。学習評価は、基本的には、教師が観察と成果物などにより評価を行います。児童による自己評価や相互評価の場面についても示しています。

◆……児童の自己評価(振り返り)と相互評価

自己評価や相互評価は、児童自身の学習活動であり、児童は、振り返り(自己評価)を行い、自分ができたことや、今後しなければならないことを明確にし、新たな見通しを持って活動していくこととなります。図1は、振り返り(自己評価)



カード例の一部です。

| 日本文化を紹介しよう | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ☆ 振り返りカード | | | | |
| ・ 1～4のうち、あてはまるものに○をつけよう。 (4:よくできた 3:できた 2:あまりできなかった 1:できなかった) | | | | |
| 1. 友だちと話し合いや、やりとりができた。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 班で協力して活動できた。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 課題や活動について考えた。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 英語について新しく知った。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 楽しく、進んで活動できた。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ・ 今日の活動を振り返って、楽しかったところ、難しくかったところ、友だちのがんばり、活動の感想などを書きましょう。 | | | | |
| <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div> | | | | |

図1 振り返り(自己評価)カード例

児童が互いに評価する相互評価では、主に改善の必要な場面でお互いに不十分なところをアドバイスしたり、友だちのできるようになったことを賞賛しあったりします。これによって、児童の次の活動の見通しや意欲へと繋がり、活動できた達成感、成就感などを持つことができます。

これらの自己評価、相互評価は、教師の評価活動と密接に関連しているため、教師の評価に加味していくことも可能です。

◆……指導案の展開例と評価計画の関わり

プロジェクトを進めていくときには、通常、各時間(活動)の展開を指導案に書き、それに沿って進めていきます。その中には、表1の評価計画に示した評価規準を示す必要があります。表2は、「④ 日本文化紹介の準備をしよう(4～6時間目)」の展開例の一部です。

最終的には、それぞれの活動場面で評価計画に合わせて評価し、これらの評価を集積し、プロジェクトや学期の終わりに、ポートフォリオや通知表などに当該プロジェクト全体の評価を記述して児童に伝えていくこととなります。次に評価例を示しています⁽⁵⁾。

(5) 第3・4学年の英語を扱う活動では、総合的な学習の時間の「国際理解学習の一環」として行われているため、評価は、総合的な学習の時間の評価となります。第4学年の総合的な学習の時間の単元「姉妹校交流」の中で「英語を扱う活動」をした場合、例えば、「姉妹都市や姉妹校について意欲的に調べ、学校での授業の様子を、英語を使って姉妹校へ発信することができました。」などと評価することになります。

表2 第6学年 日本文化を紹介しよう(日本文化紹介の準備をしよう)の展開例の一部

| 学習活動 | 教師の支援 | 教材、◇評価規準 |
|---|--|---|
| 1. 本時の課題をつかむ。 | ○紹介のシナリオを作り、その英語を練習することを確認する。 | |
| 2. 日本文化紹介のシナリオを作る。 ▽内容 ▽表現 ▽役割 | ○内容は、活動②で調べたワークシートを参考に、表現は、活動③の基本表現を参考にしながらシナリオを作っていくことをアドバイスする。 ○グループで話し合いをさせながらシナリオを作らせる。 ○役割分担をしながらワークシートに日本語で書かせる。 | 活動②で使ったワークシート ワークシート ◇積極的にシナリオを作ろうとする。 《関心・意欲・態度》 教師・観察 (発表) |
| 3. 自分たちの紹介するものの英語を置き換え練習する。 | ○置き換える言葉などがわからない場合は、グループを回って支援する。 | ◇基本表現以外の英語表現を知る。 《言語や文化への気づき・理解》 教師 (ワークシート) |

「書道」の歴史や道具について、本で詳しく調べることができました。わからない英語表現を積極的に聞き、グループで教え合いながら進んで練習することができました。

最終回の9月号では、学級担任が負担なく授業を進めるための校内研修のあり方やプロジェクト型外国語活動の実践についてのまとめを行います。

◆参考文献

高島英幸. 2010. 「外国語科(英語):理論」佐藤真(編著)『各教科等での「見通し・振り返り」学習活動の充実』教育開発研究所 pp.178-184.
 東野裕子・高島英幸. 2007. 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.
 (東野:西宮市立高木小学校教諭
 高島:東京外国語大学教授)

プロジェクトにおける子どもの変容と 校内研修のあり方

Higashino Yuko / Takashima Hideyuki
東野裕子 / 高島英幸

8月号では、プロジェクト型外国語活動における評価規準や方法について、指導内容との関連で触れてきました。最終回の今月号では、児童の興味関心や活動に対する意欲の観点から、プロジェクト型外国語活動が有効である根拠、校内研修のあり方に言及し、最後にまとめを行います。

全員がすべての項目で肯定的な評価をしています⁽¹⁾。この中には、第4学年まで、ほとんど人前で話したことのなかった児童がいましたが、このプロジェクトで、グループでの話し合いに参加し、意欲的に発表することができました。次ページにこの児童の感想を載せています。

◆……プロジェクトにおける活動意欲の変化と児童の反応

児童の興味・関心や意欲は常に変化します。児童が活動に対してどのように感じているか、1つのプロジェクトを例に、児童の意識や活動への意欲の変化を自己評価から見ていくことにします。図1は、第5学年の「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」(全8時間)の自己評価を集約したものです。評価項目と評価の段階(「よくできた」、「できた」、「あまりできなかつた」、「できなかつた」)は、本誌8月号の図1の「振り返り(自己評価)カード」を用いています。グラフは、評価項目で「よくできた」と評価した児童の人数の推移を、単元構想①②③の終了時ごとに調査したものです。グラフの下段に、児童の振り返りを単元構想ごとにまとめています。

図1からは、ほとんどの児童が、お互いに協力し、最後まで、楽しく積極的に活動に臨んだ様子が伺えます。この人数に「できた」を加えますとほぼ

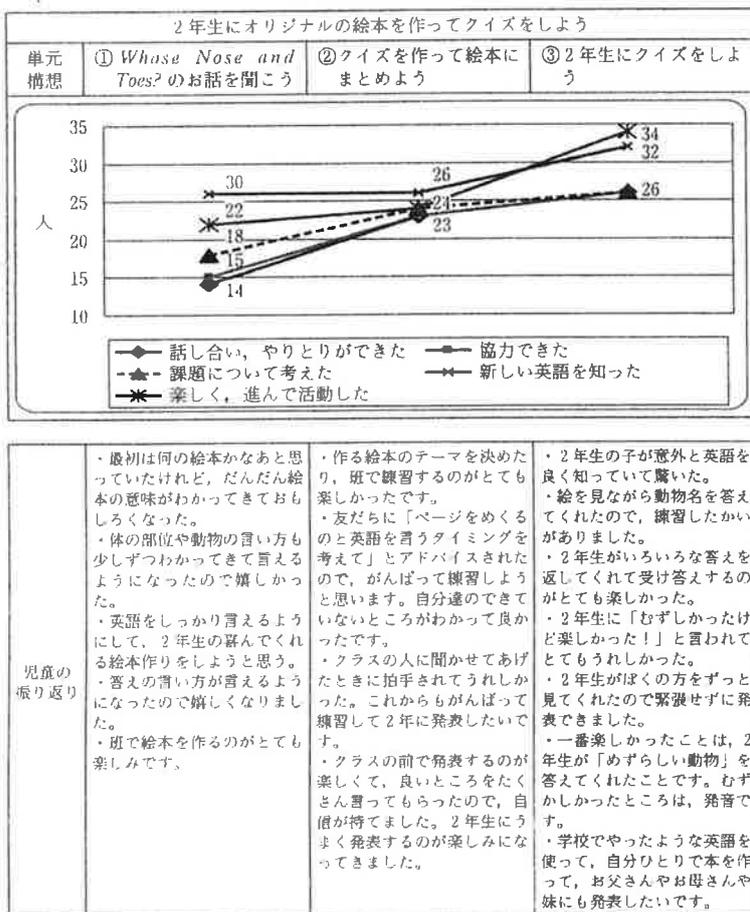


図1 「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」の自己評価(よくできた)の推移と各単元構想の児童による振り返り(第5学年児童36名対象)

「新しい英語をたくさん知れてよかったです。ゲームや歌をやりながら勉強したのでよかったです。体の部分の言い方を覚えたいです。」(絵本の読み聞かせや表現の練習をした後の自己評価より)

「2年生に読むときには、何時間も絵本を作ったり、練習したりしたので、その成果を出せたらいいと思います。」(絵本作成後の自己評価より)

「2年生への発表で、とても緊張しましたが、2年生の反応を聞いているうちに楽しくなってきました。5年生に発表したときは、すぐに答えが当たったものが、2年生には、なかなか当たらず、2年生と5年生の感じ方が違うと思いました。」(2年生へ発表後の自己評価より)

◆……企画型研修への転換

文部科学省や都道府県、市町村教育委員会は、学習指導要領の完全実施に先立ち、指導主事や中核教員への研修を行ってきました。その中核教員を中心として2009年度、2010年度の2年間で、30時間の校内研修をすることを義務付けています。

研修を企画する際に最も大切なことは、その形態と内容です⁽¹⁾。求められる研修は、一方的に与

(1) 「単元構想③」の活動の自己評価で「よくできた」と「できた」を合計すると下表のようになります。全項目において、「できなかった」と評価した児童は1人もいませんでした。

「単元構想③ 2年生にクイズをしよう」の自己評価の集計

| 評価項目 | よくできた・できた | あまりできなかった |
|-------------------|-----------|-----------|
| 1. 話し合い、やりとりができた。 | 35 | 1 |
| 2. 協力できた。 | 35 | 1 |
| 3. 課題について考えた。 | 36 | 0 |
| 4. 新しい英語を知った。 | 36 | 0 |
| 5. 楽しく、進んで活動した。 | 36 | 0 |

興味深いことに、「第5学年の「ボードゲームを作って遊ぶ」の自己評価「よくできた」の推移」(本誌2009年9月号、p.54)の調査でも全く同じ推移を示しています。

(2) 文部科学省の提案する2年間30時間の研修を、中核教員と外部の講師を招聘してのみ行うことには少し無理があります。中核教員は、多くの場合、5日間の研修を受けていますが、その内容を1人で、学校の全教員に伝達することは難しく、また、受ける側にとっても主体的な研修ではなく、授業に直結するものではありません。潤沢な予算があり、外部の講師を招聘して研修できる学校はそう多くはありません。また、小学校英語を専門に研究し、授業について適切に指導できる講師の数が、全国の小学校の数から考えると十分とは言えません。

えられているものではなく、主体的に関わり、授業改善につながるものでなければなりません。そこで、参加者自身が研修の受け手になるだけでなく、企画する側にもなるという「企画型研修」を提案します。表1は、夏休みに2時間程度で行った研修の一例で、9名の教師が研修を企画・運営することになります。

各学年の実践に関わる部分はその学年の教師が、学校外の研修については受けてきた教師が分担して計画・準備など研修を企画することで、教員全員が、研修を自分のこととして考えることができます。

◆……まとめ

子ども達が目的や課題意識を持って活動に意欲的に取り組み、達成感や満足感を持つ授業内容がプロジェクト型外国語活動にはあります。まとめに代えて、小学校で外国語活動が導入される中、気になることを2点述べてみます。

1 点目は、2002年に総合的な学習の時間に英語活動が導入されて以来、小学校教員自身が英語を扱うことに関して不安を持っていることは事実ですが、それ以上に、英語教育を専門に研究している人や保護者から、小学校で英語を扱うことに課題が多く投げかけられていることです。多くの小学校教員が、英語に関する専門的な知識や技能が十分でないことから、「英語」に対して、他の教科や領域とは異なった反応をしていることです。

例えば、体育の授業で跳び箱やマットなどの器械体操を行うとき、技能的な指導はありますが、常に学級担任がモデルを示しているわけではありません。高度な技であれば、最初はDVDなどでモデルを示し、練習方法や、補助の仕方を教え、練習していくこともあります。その過程で早くできるようになった児童がモデルになることもあります。指導の中で、自分がモデルを示さなくても、適切な指導や補助ができる教師はたくさんいます。音楽の技能に関わる点においても同様です。

学習指導要領の目標やプロジェクト型外国語活動の紹介からもわかる通り、小学校では、スキルの習得を求める英語教育ではなく、教科や他の領

表1 企画型研修の例³⁾

| 研修テーマ：プロジェクト外国語活動のあり方 実践編1 | | | |
|----------------------------|--|--|----------------------|
| 研修内容 | 詳細 | 進め方 | 担当（企画・運営） |
| 1. 外国語活動のあり方 (20分) | ・課題解決型（プロジェクト型）外国語活動のあり方の確認 ・外国語活動の動向について | ・パワーポイントでプロジェクト型の活動の特徴やカリキュラムを見せながら解説する。 ・質疑応答 | 外国語活動担当者（1名） |
| 2. 歌やゲームの紹介 (20分) | ・プロジェクトの基盤として使える歌やゲームなど校外の研修会で学んだことを伝達（伝言ゲーム、ウイスピーゲームなど） | ・外部の研修を受けた学級担任が教師役になり、研修参加者が児童になり、実際にゲームを体験する形で進める。 | 第5・6学年学級担任（2名） |
| 3. 1学期の実践の交流 (45分) | ・第4学年「シェリダン小学校に高木小学校を紹介しよう」 | ・子どもの作成したビデオや子どもの反応など、1学期の実践を他学年に紹介する。 | 第4学年学級担任（2名） |
| | ・第5学年「2年生にオリジナルの絵本を作りクイズをしよう」 | ・最終的な絵本を作る場面を子どもの作品を示しながら紹介し、ワークショップ形式で他学年の先生に作成、発表してもらおう。 | 第5学年学級担任（2名） |
| 4. 模擬授業（30分） | ・第6学年「グリーティングカードを作ろう」 | ・2学期に授業公開する6学年担任とALT役の教師が模擬授業をし、質疑応答する。 | 第6学年学級担任とALT役の教師（2名） |
| 5. まとめ（5分） | ・研修のまとめと次回の予告 | | 外国語活動担当者（1名） |

域と同じように学級担任が中心になって進める課題解決型、体験重視の活動を展開していかなければなりません。英語力も大切ですが、それ以上に児童の実態をとらえ、それに合った授業を構成していく力が最も必要なことは明らかです。

2点目は、小学校に英語が導入されるということ、「英語を教える」ことを思い浮かべる人が多いということです。小学校段階では、「コミュニケーションへの態度の育成」に重点をおき、「コミュニケーション能力の素地の育成」が目標です。この「態度の育成」は中・高等学校の学習指導要領の目標の1つでもあります。なぜ、小学校でスキルを目的としないかは、日本に先んじて1997年に初等教育に英語教育を導入した韓国の例をみれば明白です。韓国では、全国統一の教科書を使用、全小学校教員に研修を課し、教室には大型モニタ

ーを設置、教科書に準拠した音声教材を配布するなど、国家をあげてスキルを習得することを目的に推し進めてきました。しかし、10年余りたった今、小学生の英語嫌いの増加や学力の二極化が問題となっています。同じようなことが台湾でも起こっています⁴⁾。

日本での外国語活動導入に当たっては、学習指導要領の目標に沿った授業内容や指導方法は課題解決型を基本とし、児童の発達段階に見合ったコミュニケーション能力の素地の育成を、小学校の教育課程の1つとして進めていくことを考え実践していくことが大切です。

◆参考文献

- 人見徹，他．2010．「小学校外国語活動の今後を考えるー求められる授業内容とは何か」『教職研修』8月号 pp. 108-111.
高島英幸．2009．「小学校外国語活動はプロジェクト型で！ 学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方⑥」『英語教育』9月号 pp. 52-55.

（東野：西宮市立高木小学校教諭
高島：東京外国語大学教授）

(3) 年間の研修で理論編を2回、実践編を3回計画しました。この研修は、実践編の1回目なので「実践編1」としています。

(4) International Conference on Teaching and Learning of English for Children for Early Years in the Asia-Pacific Region, May 28-29, 2010, Hong Kong. でのパネルディスカッションより。